

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年5月27日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02545

研究課題名(和文) 19世紀フランス文学における身体、感覚、病理の表象

研究課題名(英文) Representations of body, sensation and pathology in the 19th century French literature

研究代表者

小倉 孝誠 (OGURA, Kosei)

慶應義塾大学・文学部(三田)・教授

研究者番号：60204161

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：わが国で文学史的な評価が低く、深く研究されてこなかったフランス自然主義文学に焦点を据えながら、文学作品において身体、病理、感覚のテーマがどのように語られてきたかを考察した。その際、文学史的な観点からだけでなく、文化史の方法も採り入れながら、文学と医学的あるいは生理学的言説のつながりを問いかけた。その結果分かったのは、ゾラやゴンクールなどが、同時代の医学の知を物語の展開や登場人物の造形に活用することで、独自の身体表象を創りあげたということである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医学や性科学、さらには科学一般が、人々の想像力のあり方と表象システムを変えるという認識が、わが国の文学研究の場ではあまり共有されていない。本研究は、19世紀後半～20世紀前半のフランス文学を対象を絞りながら、日本のフランス文学研究において軽視されてきた自然主義文学の新たな側面を明らかにしたという意義を有する。また身体というテーマを媒介にすることで、文学と科学一般の関係を分析する独自の方法を提示したという点で、人文学の新たな可能性を社会に向けて発信したと言える。

研究成果の概要(英文)：I questioned the way in which literature represents the body, the pathology and sensations, focusing my study on the French naturalistic novel, hardly appreciated and hardly studied in Japan. I thought about the link between literature and medical or physiological discourse in terms of both literary history and cultural history. I showed that Zola and Goncourt, for example, inserted medical knowledge in the construction of the story and characters, creating an original image of the body.

研究分野：仏文学・仏語圏文学

キーワード：エミール・ゾラ ゴンクール 身体 病理 精神医学 性科学 性倒錯 女らしさの神話

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はバルザック、フロベール、ゾラなど 19 世紀フランスのリアリズム作家を中心に研究を進め、その成果を公表してきた。またアラン・コルバンなど現代フランスの文化史的な著作の翻訳にも携わってきた。その中には『身体の文化史』(単著、2006)、『身体はどう変わってきたか 16 世紀から現代まで』(共著、2014)、そしてアラン・コルバン監修『身体の歴史』(監訳、2011)などが含まれていた。本研究はこれらの蓄積を踏まえ、その延長線上に位置しながら、身体と病理をめぐってより体系的な研究を試みようとしたものである。

今回の研究課題との関連で、研究代表者の近年の研究はエミール・ゾラ(1840 - 1902)に関するものが多い。ゾラ晩年の作品『豊饒』(1899)は、多産な夫婦の幸福と繁栄を語ることで、同時代の産児制限イデオロギーに真っ向から対立する。その背後にあるのは、19 世紀半ば以降、医学者や教育者たちによって数多く書かれた「性科学」の著作であり、こうした著作は一般市民のあいだに性と倒錯に関する知識を広めるのに寄与した。これらの研究で培った問題意識と方法論を研ぎすませつつ、研究の対象をさらに広げ、ゾラだけでなく、やはり多様な病理現象を物語化しているゴンクール兄弟やドーデやユイスマンズ、さらにはミルポー、ラシルド、モークレールなど世紀末のデカダン作家にも目を向けたいと考えた。しばしば言われるのと違って、身体と病理は自然主義文学の専有物ではなく、同時代の他の文学潮流にも看取される主題だからである。

ゾラに関して言えば、研究代表者は『ゾラ・セレクション』(藤原書店、全 11 巻、2002 - 2012)の監修者および訳者である。このセレクションは、日本におけるゾラ研究の発展に大きく寄与したと自負している。また研究代表者は、「自然主義文学研究会」の世話人として年 3 回の研究発表会を企画している。さらに研究代表者は、日本を代表するゾラ研究者の一人として、これまでフランスの研究誌に寄稿を依頼されたり、国際シンポジウムに招かれて発表したりしてきた。こうした国内外での評価も、今回の研究課題の背景になっている。

とりわけ 19 世紀後半の作家たちの作品の新しい精緻な批評校訂版や資料が、この 10 年ほどの間に次々と刊行されていることが、この研究を推進する強い動機付けになっている。その多くは現在も刊行中である。例を挙げるならば、ゾラ『ルーゴン=マッカール叢書』全 20 巻の準備ノート(2003~、既刊 7 巻)、ゴンクールの『日記』(2005~、既刊 3 巻)などである。これら新たな校訂版や資料は、文学における身体、感覚、病理の主題を探求する上で貴重な助けになるはずである。

2. 研究の目的

19 世紀の文学、とりわけ小説ジャンルにおいては、身体と病が重要な主題として浮上してくる作品が多い。そこには同時代の医学、生理学、生物学などとの共鳴関係が見てとれる。本研究の目的は、この時代の小説が医学の言説をどのように取り入れ、それによって身体と、感覚と、病をめぐりいかなる文学的表象を提示しているか明らかにすることにある。特に世紀後半の文学者たちが身体の病のみならず、精神の病理(狂気、神経症、ヒステリー、性倒錯など)にも新たな表現をもたらした過程をたどり、その特徴を析出させる。さらに、一般に文学と科学の知がどのように切り結ぶのか、その結果、文学の表象がどのように変化していくのかという、より広い問題系に対しても、新たな視点に立って回答を見出すことを目指す。具体的には次のような目標を立てた。

(1) まずエミール・ゾラの作品、特に初期と中期における代表作にそくして、身体と感覚の表象を考察する。これまでは女性の身体に着目して、そのジェンダー性を論じてきたが、身体

の政治性や社会性にも目を向ける。ゾラ文学はしばしば、遺伝理論や生理学の粗雑な応用だと非難されてきたが、彼の小説をていねいに読めば、こうした非難があまりに単純であることに気づく。ゾラの場合、作品執筆に際して取られた読書ノート、取材メモ、構想メモおよび草稿が体系的に残されているので、それらを参照することで、ゾラが身体表象に込めようとした意図をより明確にする。

(2) 次にゴンクール兄弟、ドーデ、ユイスマンスなどの自然主義作家において、身体と精神の病理がどのような意味づけをされているか分析する。民衆の身体を描いたという意味で、これらの作家はゾラと共通しているが、他方で、衰弱する身体、崩壊する身体をしばしば描いたという点でゾラとは異なる。この違いは作家の人間観の問題であると同時に、彼らが依拠した文献資料にも由来するだろう。当時の医学者、生理学者、精神医学者(たとえばモレルやマニャン)の著作と綿密に照合することで、彼らがどのような医学的知を、いかにして物語の中に包摂したのか、その過程を明らかにする。

(3) 最後に、19世紀末のデカダン文学におけるセクシュアリティと精神病理の問題を考察することで、20世紀文学との連続性を明らかにする。フロイト理論の影響もあって、20世紀文学は身体と性をめぐって新たな表象体系を築くことになるが、19世紀末のミルポー、ラシルドなどの作品には、すでにフロイト理論を先取りするようなページが見られる。もっぱら頹廢趣味との関連で論じられがちなこれらの作家を、同時代の医学的言説の中に位置づけることで、文学における身体と病理の新たな側面を明らかにする。

3. 研究の方法

ゾラの草稿は未刊のものが多く、また19世紀末の作家の作品は日本で入手できないものが多いので、毎年2~4週間ほどフランス国立図書館、パリ高等師範学校、およびゾラ研究センター(パリ)で文献調査を行なう。また内外の研究者との研究会、および人的ネットワークを活用して、課題の考察と資料収集を進捗させる。具体的には次のとおりである。

(1) 研究代表者は「自然主義文学研究会」(会員数約35名)の世話人を務めており、年3回、本務校である慶應義塾大学および仏文学会秋季大会開催校にて研究発表会を開催している。この研究会には日本全国の研究者が参加し、ゾラ、モーパッサン、ユイスマンス、ヴァレスなど多様な作家に関する密度の高い発表と質疑応答が行なわれている。会員には第一線の研究者が含まれ、日本におけるゾラ研究の中核を担う人たちである。来日したフランス人研究者をゲストとして招聘し、講演してもらうこともある。研究代表者はこの研究会をつうじて、ゾラと自然主義研究に関する知見を広げ、内外の貴重な情報を得ることができる。

(2) フランス人研究者との連携も確保している。まず、現在ゾラ研究の第一人者であり、学術雑誌『自然主義評論』の主幹であるアラン・パジェス氏(パリ第三大学教授)とは密接な交流があり、研究上の有益なアドバイスや助言を得られる。『自然主義評論』は、ゾラおよびその周辺の作家、文学運動に関する最も重要な国際研究誌(仏語)で、研究代表者は2012年に寄稿している。次に、19世紀小説における身体の問題に詳しいジャン=ルイ・カバネス氏(パリ第十大学名誉教授)とは、ほぼ10年来の親交と密な研究交流がある。研究代表者と関心領域が近い研究者なので、調査・研究が行き詰まった場合は、カバネス氏に積極的に助言を求めつつもりである。パジェス氏が責任者を務める「ゾラ研究センター」(フランス国立科学研究所の一機関)には、ゾラ関連のあらゆる資料が保管されており、研究代表者は積極的に活用したい。「自然主義文学研究会」はこのセンターと非公式に研究提携を結んでおり、文献資料の閲覧、調査については便宜を図ってもらうことになっている。

(3) 海外調査の必要性：19世紀末の作家の作品および関連資料は、日本で入手困難なものが多いので、毎年2~4週間ほどパリでの資料調査が必要になる。フランス国立図書館には文献資料のほかにゾラの草稿が保管され、パリ高等師範学校には文学研究書が豊富に所蔵され、ゾラ研究センターにはゾラに関連する著書、資料、手紙のコピーなどが保存されている。さらに、ゾラと自然主義の研究者が数多く所属するパリ第三大学の教授スタッフと積極的な情報交換、意見交換を行なう。

4. 研究成果

(1) 初年度と2年目は、19世紀後半を代表する作家エミール・ゾラの作品における身体と病理の表象について、文献調査と考察を進めた。まずゾラの最新の全集版、彼の主著『ルーゴン=マッカール叢書』の準備ノートの校訂版、いくつかの作品の新しい批評校訂版を購入し、草稿研究の知見を踏まえつつそれらの文献を精読することで、とくに叢書第1巻『ルーゴン家の繁栄』を詳細に分析することができた。その成果は、「ゾラ『ルーゴン=マッカール叢書』の起源」（慶應義塾大学『日吉紀要』第64号、2017年）に発表した。文献調査のため、夏期休暇と春期休暇を利用して渡仏し、パリ国立図書館で19世紀後半の医学事典や医学書を参照し、ゾラ文学に見られる身体表象や精神病理との共鳴関係を探った。これらの研究成果を、『ゾラと近代フランス 歴史から物語へ』（白水社、2017年7月）としてまとめた。本書は近年の日本における際立ったゾラ研究書として、引用・言及される著作になっている。

(2) 研究代表者は、2015年6月にパリで開催された「自然主義文学の遺産」をめぐる国際シンポジウムに招聘されて口頭発表しており、その原稿が2016年10月に出版されたNaturalisme. Vous avez dit naturalismes? に収められている。これは自然主義文学の国際的な広がりやインパクトを明らかにした研究成果である。また同じく国際的な業績としては、2017年11月にフランスで刊行された Dictionnaire des naturalismes (『自然主義事典』) に寄稿し、国際的なプロジェクトの一翼をになった。

(3) 続いてゴンクール兄弟、ユイスマンスなどゾラと同時代の他の作家に軸足を移して研究・調査を進めた。それによって、ゴンクール兄弟の小説においては、同時代の医学的な知がゾラの作品以上に深く取りこまれていることが分かった。彼らの文学は一般にリアリズム(レアリズム)文学と呼ばれるが、民衆や、身体と病理のテーマをリアリズム文学全体の中に位置づけることで、研究を進展させることができた。その成果を公開研究会「19世紀文学とリアリズム」（2018年2月3日、京都大学）で発表し、その後まとめられた報告書に原稿を掲載した。

(4) 最終年度は、19世紀末のデカダン文学における身体と病理の問題を、同時代の精神医学や性科学との関連で考察した。年度前半では、とくに女性作家とセクシュアリティの問題、そして自然主義作家における身体表象を考察した。3年間にわたった本研究の総括として、研究代表者は単著『逸脱の文化史 近代の 女らしさ と 男らしさ』（慶應義塾大学出版会、2019年4月）を刊行した。本研究の目的は、19世紀後半~20世紀初頭の文学を対象にして、文学が身体、感覚、病をめぐってどのような表象を提示しているかを探究することだった。とりわけ自然主義小説が身体の病理だけでなく、精神の病理(神経症、ヒステリー、性倒錯など)の表現に新たな次元をもたらしたことを示すことにあった。『逸脱の文化史』はゾラ、ゴンクール、ユイスマンスなどの自然主義作家、そしてラシルド、ミルボーなど世紀末デカダン作家の作品を取りあげ、感応遺伝、性倒錯、フェティシズムなどのテーマを病理の表象として読み解くことで、わが国のフランス文学研究に新境地を拓いた。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

1. 小倉孝誠、「若い娘たちの表象 魂から身体へ」、『日吉紀要 フランス語フランス文学』、査読無、第 67 号、2018 年、pp.33-56.
2. 小倉孝誠、「アラン・コルバンと歴史学の転換」、『思想』(岩波書店) 査読無、第 1125 号、2018 年、pp.150-160.
3. 小倉孝誠、「ゾラ『ルーゴン=マッカール叢書』の起源」、『日吉紀要 フランス語フランス文学』、査読無、第 64 号、2017 年、pp.1-20.

〔学会発表〕(計 3 件)

1. 小倉孝誠、「女性作家と文学場のジェンダー」、日本フランス語フランス文学会ワークショップ、2018 年
2. 小倉孝誠、「リアリズム文学における知と視線 19 世紀フランス文学にそくして」、リアリズム文学研究会(招待発表)、2018 年
3. 小倉孝誠、「女らしさと男らしさ 19 世紀フランスのジェンダー規範」、総合研究所・国際服飾学会(招待講演)、2017 年

〔図書〕(計 6 件)

1. 小倉孝誠、慶應義塾大学出版会、『逸脱の文化史 近代の 女らしさ と 男らしさ』、2019 年、241p.
2. 田口紀子、小倉孝誠ほか、リアリズム文学研究会、『19 世紀文学とリアリズム 共時的文学現象に関する文化横断的研究』、2018 年、94p. (pp. 7-18)
3. 小倉孝誠、白水社、『ゾラと近代フランス 歴史から物語へ』、2017 年、358p.
4. Colette Becker, Kosei Ogura..., Champion, Dictionnaire des naturalismes, 2017, 1002p. (pp.557-559)
5. Gisele Seginger, Kosei Ogura..., Champion, Dictionnaire Flaubert, 2017, 1771p. (pp.273-274, 676-678, 1521-1525)
6. Colette Becker, Olivier Lumbroso, Kosei Ogura..., Presses Sorbonne Nouvelle, Naturalisme. Vous avez dit naturalismes ?, 2016, 220p. (pp.49-53, 121-128)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。